

研究報告

喜界島におけるゴマダラカミキリ類の昆虫病原糸状菌製剤
“バイオリサ・カミキリ”による防除鹿兒島大学農学部 ^{つだ}津田 ^{かつお}勝男・^{さかまき}坂巻 ^{よしとか}祥孝

はじめに

ゴマダラカミキリは黒地に白い紋を持つ大型のカミキリムシで、市街地でもその姿を見ることが出来る。そのため一般に最も知られているカミキリムシの一種である。小島・中村(1986)によるとゴマダラカミキリ幼虫は46種以上の樹木を食べる広食性で、特にカンキツ類とセンダンを好み、カンキツ類の害虫として問題になっている。

奄美諸島ではゴマダラカミキリ類によるカンキツ類の被害が問題になっており、特に喜界島ではカンキツ類が次々と枯死している。奄美諸島には元々オオシマゴマダラカミキリ *Anoplophora oshimana* (以下オオシマゴマダラ) が生息していたが、カンキツ類の被害は以前にはそれほど問題とされていなかった。その要因として、オオシマゴマダラは加害植物としてイヌノキやスタジイを好むと考えられていた(大林・新里, 2007)。

しかし、喜界島では2008年ころからゴマダラカミキリ類による被害が目立ち始めた。一方、本州から九州、屋久島まで分布していたゴマダラカミキリ *A. malasiaca* (以下ホンゴマダラ) は1970年代に奄美諸島へ侵入したことが確認されており、それ以降はカンキツ類の被害が散見されていたとも言われている。このため、地元では侵入してきたホンゴマダラがカンキツ類に被害を与えていると考えられてきた。ただし、筆者らの2011年以降の調査では、カンキツ園では実際にホンゴマダラだけでなくオオシマゴマダラ、さらに両種の交雑種と思われる個体が採集されている(坂巻ら, 2016)。

本稿では、オオシマゴマダラおよびホンゴマダラ、さらに両種の交雑種と思われる個体群も含めて「ゴマダラカミキリ類」として記述する。

九州本土のカンキツ園では通常ゴマダラカミキリの防

表-1 喜界島におけるゴマダラカミキリ
買取数の年次推移

年度(年)	買取数(頭)
2007	2,040
2008	1,953
2009	-
2010	-
2011	1,730
2012	1,358
2013	1,686
2014	3,173
2015	3,601
2016	1,427

データは喜界町役場産業振興課提供。
2009年と10年は買取りを行っていない。
2015年からバイオリサ全島施用を開始。

除対策として、殺虫剤の散布および捕殺による成虫期防除のほか、殺虫剤の食入孔注入や針金による捕殺などの幼虫期防除が行われるが、喜界島においては十分な防除対策がとられていなかった。また、喜界島においては経済栽培園以外に一般家庭の庭先に植栽されているカンキツ類も多く、これらのカンキツ類の被害も発生を助長していると考えられていた。さらに、喜界島においては生活用水を地下水源に依存しており、殺虫剤の散布には制約がある。

喜界島では、ゴマダラカミキリ類の防除対策として2007年から成虫の買上げを行っている。この取り組みには地域住民にゴマダラカミキリ類がカンキツ類の害虫として重要であることを認知してもらう意味も込められている。表-1に喜界島町における買取り数の推移を示した。買取り数は、2011年、2012年に減少したが、2014～15年と再び増加した。買い取りによる効果はあったと考えられるが、残念ながら成虫の買取りだけでゴマダラカミキリ類の発生量を抑えることはできなかった。

そこで、ゴマダラカミキリの生物的防除素材として普及している“バイオリサ・カミキリ”の利用について検討した。

Biological Control of the Whitespotted Longicorn Beetles, *Anoplophora* spp. by an Entomogenous Fungus, *Beauveria brongniartii* in Kikaijima Island. By Katsuo TSUDA and Yosataka SAKAMAKI

(キーワード: 喜界島, ゴマダラカミキリ類, カンキツ, バイオリサ・カミキリ, *Beauveria brongniartii*, 広域施用)